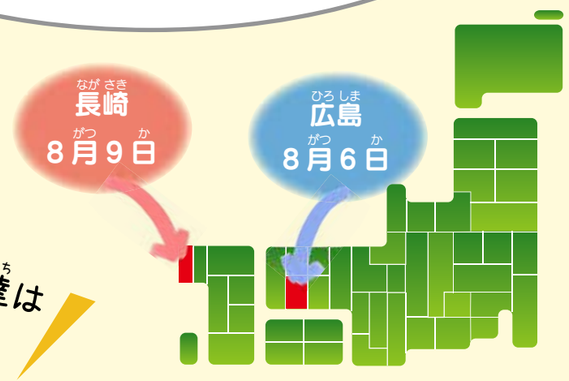
いのちと生きる権利

戦争の実話から学ぶ「人権」

日本は世界で初めて原子爆弾の被害を受けた国なんじゃ。
被爆地・広島での話をとおして、いのちや生きる権利について考えてみてほしい。



住んでいた人達はどうなったの？

原子爆弾が投下された日

1945（昭和20）年8月6日午前8時15分、アメリカ軍によって日本の広島市に原子爆弾が投下されました。世界で初めて核兵器が実戦使用された日であり、人類史上初の都市に対する核攻撃でした。これにより、当時の広島市の人口約35万人のうち、約14万人がその年の12月末までに亡くなりました。

広島への原子爆弾投下から3日後の8月9日午前11時2分には、長崎市にも投下されました。当時の長崎市の人口は約24万人でしたが、約7万4000人が亡くなりました。

広島で被爆したちづこさんの話

1945（昭和20）年、当時16歳のちづこさんは、父と母と3人の妹（中学生、6歳、3歳）と広島で暮らしていました。8月になってすぐ、空襲で家が被害にあう前にと、家の中で写真館の人に家族写真を撮ってもらいました。

その数日後の8月6日の朝、ちづこさんは缶詰工場へ、中学生の妹は別の作業場へ行くため家を出ました。そして8時15分、広島の街に原子爆弾が落とされたのです。爆風でつぶれた工場からなんとか這い出たちづこさんは「家族が離れ離れになったときに集まろう」と話し合っていた、少し離れた場所に向かいました。また家族に会えることを信じて数日待ち続けたちづこさん。しかし、そこには誰も来ませんでした。家族を探しに広島の街へ戻ると、そこに広がっていたのはがれきの山でした。家があった場所を掘り返し、顔も分からない真っ黒な遺体を見つけました。身につけていたわずかな物から、お父さんと6歳の妹だと分かりました。台所があった場所では、3歳の妹をかばうようにして亡くなっていたお母さんを見つけました。ピカッと光った瞬間、お母さんは妹をギュッと強く抱きしめたのでしょう。真っ黒なお母さんと妹の間には、洋服の切れ端が焦げずに少しだけ残っていたそうです。ちづこさんは「お母さんの着ていた服だ」と泣き崩れました。中学生の妹は行方不明のままで、いっしょに作業をしていた女子学生700人は、誰ひとり生き残ることができませんでした。終戦後、写真館の人がちづこさんに写真を渡しました。最後に撮った家族6人の穏やかな表情。みんなで出来上がりを楽しみにしていましたが、見ることができたのは、ちづこさんだけでした。それ以来、ちづこさんが写真を撮ることはありませんでした。

（ちづこさんの子・岩田美穂さんのインタビューより／P.18 研修報告参照）